一（いち）パーセント

水口　薫

三年余り前私は脳梗塞を発症した。命を取り留めたものの、その後後遺症により身体の自由を奪われた。リタイヤして約六年、ライフワークとしていた里山暮らしがようやく軌道に乗ってきた頃である。四ヶ月の入院生活の後、地元の介護施設に通い始めた。

ミナはその介護施設の介護福祉士であるが、現在中一の息子と二人で暮らすシングルマザーで生計はミナが担っている。私がデイサービスを受けるようになって以来、時日が経つほどに親しくなっていった。ミナは生活のこと、子育ての悩み、将来の夢や不安等をありていに語っていた。ミナとは親子ほど歳の差はあるが、不思議なほど素直になれる。私の心身の状態、希望、悩み、価値観や人生観など思いの丈を素直に話せた。二人になる機会を意図的に作り、携帯電話やメールでも対話した。

シングルマザーだと知ったとき、おぼろげながら「良きパートナー」を意識した。ミナと室内プールに出掛け、その後食事に誘い告白する。以降は成り行きだが、「あわよくば特別な関係を」と、よこしまな思惑と欲望のままに身勝手なシナリオを思いを描いていた。自身の夫婦関係が、甚だしい価値観の相違や不信感により閉塞状態にあったことも、ミナを想う気持ちを増幅させたのかもしれない。プールでのリハビリを名目に同行して欲しいと以前から要望していた。ようやくその気になってくれたようだ。

施設が休日の土曜日、ミナのプール用水着を買いにスポーツ用品店へ出かけた。ビーチ用と異なり色とりどりの派手さはないが、見るからにスポーティでボディラインやストライプがくっきりと現れる。

「これがいいかなー、ちょっと派手かな」

独り言のようだが、片目を瞑り私に問いかけるような仕草をみせた。

「フフフッ……」
含み笑いの横顔は少女のようなあどけなさを漂わせている。何種類かを手にしては身体に合わせ、鏡を見てはまた笑う。
「うーん・うーん、最近ちょっと太ったかな。これにしようかな、どお？」
ミナの問いかけに、私が頷くやいなや。
「これに決めた、試着してくるねっ」
視界から消えると同時に、試着する姿が脳裡を駆けめぐった。ミナの女を意識し特別な感情が加速していった。
意識し始めたきっかけは半年余り前、ごく些細なことだった。デイサービスでの一こま。要介護2の私は、柔軟やストレッチ・トレーニング用器械類を使いリハビリに精を出していた。午前中にひと汗、濡れたTシャツを外の物干しに干した。テーブルに戻ると、臭いのないTシャツが丁寧にたたまれてあった。介護士の彼女らにとっては日常当然の仕事なのだろうが、私には他の女性スタッフとは丁寧さが一味違って見えた。いや、そう見ようとしていたのかも知れない。
「取り込んでくれたのは誰」と訊いた。
「ミナさんよ」、その場にミナは居なかったが冗談交じりに、
「洗ってくれたんだね、ありがとう。嫁にしたいなー」と、大げさに呟いた。
普段は〝出来ることは自分でやる〟ことを信条としていたが、当日は急に空模様が怪しくなり、すっかり忘れていたので余計に感ずるところがあったのだろう。特別な感情が芽生えたのは事実である。
障害を持つ身になると、健常者は羨望と憧憬の的である。見てくれがどうとか、動作がどうとか、頭がどうだろうがそんなものはどうでもよい。とにかく人間の生の営みにおいて、自らは不自由となった身である。健常者であること自体が、無二の価値と思えた。
高齢者年代、凡庸な男にとって性的終末期でもある。三十路後半からアラフォーの女盛りは、フェロモンの最盛期なのだろうか眩しく映る。妙に惚れっぽくなるのは、この病のせいか、それとも男のやるせない性（さが）なのだろうか。
以前メディアで、障害者の「性の問題」が取り上げられていた。障害者は世間の狭間で負の存在としてひっそり暮らしているのが実態である。「性の話」などもっての外、タブー視されてきた。語ることさえはばかられる状況である。だが障害者

であろうと、性を意識することは生きていることの証である。近年、基本的人権として認識されているという。映像には、アメリカでの「障害者の性カウンセウリング」が紹介されていた。

「人としての権利」は、健常者と何ら変わるものではない。

数刻前スポーツ用品店で、想像を逞しくしていたミナの姿が目の前にあった。施設では常時スラックス姿で、夏でも胸元が見えにくい服装である。足の装具や足温器の装着等患者足許での介助作業も多く、自ら露出度は制限される。私自身、ミナの胸元や二の腕、ふくらはぎさえ見たのは初めてである。熟女の域に近いはずだが、童顔で特有のふくよかな容姿は年齢に較べ若く見える。

プールの中では不自由な私をおもんばかり、手を携え身体を支えてくれた。とはいえ障害者扱いではない、それがまた好感度を増す。要するに、何事もひいき目に映るのである。ブレストを繰り返した。私はかって水泳大会にも出場し泳ぎは得手な方だったが、今はその面影のかけらもない。

発症後三年余り「努力は裏切らない」と、リハビリに専念してきた。未だ偽装感覚で身体が強張っているが、それでも「継続の力」でここまで回復してきた。

この高揚感、同じ環境でありながら一人で過す時とのこの差は何なのだろうか。水しぶきさえ輝いて見える。リハビリに紛れて追っかけっこ、年甲斐もなくふざけ合いながら約二時間。水中ではふらつきや転倒の不安感は一掃され、心にゆとりができる。素ピンのミナ、さすがに歳は隠せないが笑顔や所作の若々しさはそれを補って余りある。

瞬く間に時は過ぎた。楽しかった。心地良い疲労感と、ときめきの余韻を残してレストランで食事を摂った。ミナは幼い頃離別した父親とは一度も会ったことがなく、顔さえ知らぬという。そして自らも離婚せざるを得なかった事情。二人の子は双方に別れ、中学一年になる長男「翔太」と暮らす。小五の長女は相手方に引き取られているが兄妹間の往来は自由、子供達の意思を尊重しているという。自らの境遇と裏返しの現実。ともすれば陰に籠りがちになるが、その素振りなどおくびにも出さず常に笑顔を絶やさない。天性の明るさだろうか、それとも感情を押し殺しているのか、いじらしく愛おしい。込み上げる感情を抑えつつ、想いを告白した。

屈託なく笑うミナは、私の実娘より若く健康そのものである。後遺症に苛まれる

私の身体、どうあがいても釣り合うはずがない。だが感情の高まりは抑えようがなかった。

「ミナと一緒に暮せば笑いが絶えず、毎日が楽しいだろうな。愛する気持ちは誰にも負けない」

ミナは視線を外し、伏し目がちに呟いた。

「ありがとう……」

私はミナを見つめながら、一気に話した。

「必ず、一緒になって良かったと思えるようにする。この年齢差そして障害を持つ身、ミスマッチも甚だしいが後悔はさせない」

そして、ミナにとって最も大切な「翔太」のことにも触れた。

「翔太にとってはおじいちゃんのような存在だが、きっと解かってくれる」

ミナは私の性急で身勝手な告白を、複雑な面持ちで聴いていた。

私の障害の現状、女房との家庭内別居や仮面夫婦・不和の実態。そして、今後の生活の糧となる蓄財についても事実を話した。一通り話し終え間ができた。多分一分に満たない時間だと思うが、やけ長く感じた。沈黙を破り、一気に攻め込む戦略をとった。

「これからホテルを予約する、許されるならミナが帰る時間まで一緒に居て欲しい」

ミナは、驚いた様子で私を見つめた。

「実は俺、特に左半身の麻痺の影響で、男の機能にも差し障りがある。退院後約三年、セックスレスが続いている」

性の話しにまで肉薄する私の勢いに圧倒されたのか、ミナは目を逸らした。

「ミナと一緒になるためには、最大の障碍と自覚している。今日それが叶うなら、その結果で判断して欲しい」

独りよがりの思い込み。「叶うはずはない」との思いとは裏腹に、「ひょっとして……」

淡い期待に胸が高鳴った。障害者であることを逆手に取って卑怯者と言われようが、憐れみでも同情でも不義のそしりを受けようとも、何んら怖れるものはない。とにかく、ミナの全てが欲しかった。

固唾をのんでミナの顔を覗くと、視線が定まらない。いろんな思いが駆け巡って

いるようである。困惑したミナの表情が、微妙な間と絡み合った。言葉を選んでいるのか、何か言おうとしているがはっきり聞こえない。

「今、同居している彼が……」と、小声で呟いた。

未練がましいと思ったが

「一パーセントだけ可能性を残しておいて欲しい」と、告げた。

ミナは「ごめん」と、一言。

一パーセントがさまよい始めた。